彙　報

平成十年度研究所活動報告

研究会「弘法大師の思想とその展開に関する研究」

平成八年度から二年間にわたって行われた研究成果は、平成十一年一月に『弘法大師の思想とその展開』（高野山大学密教文化研究所紀要　別冊1）として刊行された。所収の論文題目等は前号彙報のとおりである。

研究会「密教の形成と流伝に関する研究」

共同研究「密教の形成と流伝に関する研究」では、平成九年度に引き続き、高木所長、森・生井・乾・奥山・室寺各所員をメンバーに、学外の委託研究員として山下博司・野口圭也・大塚伸夫三氏を加え、平成十年度は次の四回にわたって研究会を開催した。発表者と題目は次のとおり。

平成10年6月22日　野口圭也「密教におけるサハジャ思想と如来蔵思想」
　　森　雅秀「オリッサ州カタック地区出土の観音像」
10月12日　生井智紹「密教の展開について―国際チベット学会に出席して」
　　山下博司「南インドと密教をつなぐもの」
平成11年2月2日　室寺義仁「唯心と密教的瞑想法の源流について」
　　乾　仁志「『初会金剛頂経』における如来蔵思想の展開について」
4月20日　奥山直司「埋蔵と化身」

平成十年度研究所所員研究業績

高木　訒元

○論　文

「日本密教形成序説」　『弘法大師の思想とその展開　高野山大学密教文化研究所紀要』別冊1　一九九九年一月　一―三四頁

森　雅秀

○著　書

『オリッサ州カタック地区の密教図像の研究』（平成八～十年度文部省科学研究費補助金　基盤研究C2　成果報告書）　一九九九年三月　八八頁

○論　文

「密教儀礼の成立に関する一考察　―アビシェーカとプラティシュター―」松長有慶編『インド密教の形成と展開』　法蔵館　一九九八年七月　三〇五―三二八頁

「ツィンマーマン・コレクションの「ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅」―チベットにおけるマンダラ伝承の一事例―」　『美術史』第一四五冊　一九九八年十月　六四―八一頁

「オリッサ州カタック地区の密教美術」　『国立民族学博物館研究報告』第二三巻第二号　一九九八年一二月　三九五―五三六頁

「集会樹の造型と儀礼」　『印度学仏教学研究』第四七巻第一号　一九九八年一二月　一九四―二〇〇頁（横組）

「『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説の一〇八マンダラ」　『高野山大学密教文化研究所紀要』第一二号　一九九九年二月　一―九三頁（横組）

「青海省同仁県のポン教寺院」　長野泰彦編『チベット文化域におけるポン教文化の研究』（平成八～十年度文部省科学研究費補助金　国際学術研究・

学術調査　研究成果報告書）　一九九九年三月　二一―四六頁
「インドとチベットの密教における実践と美術」　宮治昭編『宗教的実践の視点による仏教美術とキリスト教美術の比較研究』（平成九―十年度文部省科学研究費補助金　基盤研B二　成果報告書）　一九九九年三月　七五―八五頁
「ミトラ・ヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ」　『密教学研究』第三一号　一九九九年三月　五五―八八頁
○口頭発表
「集会樹の造型と儀礼」　日本印度学仏教学会第四九回学術大会　一九九八年九月
「オリッサ州カタック地区出土の観音像」　高野山大学密教文化研究所研究会「密教の形成と流伝に関する研究」　一九九八年九月
「インド密教における儀礼の形成と展開」　仏教史学会例会　一九九八年九月
「ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ」　日本密教学会第三一回学術大会　一九九八年十月
○その他
「補遺」　『松長有慶著作集　第四巻　マンダラと密教美術』　法蔵館　一九九八年四月　三四一―三五九頁
Kalpakam Sankaranarayan, Motohiro Yoritomi & Shubhada A. Joshi eds., *Buddhism in India and Abroad: An Integrating Influence in Vedic and Post-Vedic Perspective*, Mumbai, Somaiya Publications. In Sambhasā, Vol. 19, September 1998, pp. 129-132.（書評）
「インドの宗教に見られる生死観」　高野山大学生命倫理研究会編『生と死：いのちを考える　平成十年度生命倫理講座講義録』　高野山大学　一九九九年三月　三〇七―三五五頁

生井　智紹
○論　文
「真言理趣による行の確立」　松長有慶編『インド密教の形成と展開』　法蔵館　一九九八年七月　一〇三―一三八頁
「華厳経における陀羅尼　―その内的展開と外的影響―」　『密教学研究』第三〇号　一九九八年三月　一五―三二頁
○口頭発表
On *mantranaya*, at 8th Seminar of the International Association of Tibetan Studies (Indiana University, July August 1998.)

山陰加春夫
○著　書
『城陽市史　第三巻』（樋口隆康他と共編）　京都府城陽市　一九九九年三月　五九一―八二六、九三三―九三七頁
○論　文
「中世『寺社縁起』の案出　―讃岐国善通寺の場合―」　『弘法大師の思想とその展開　高野山大学密教文化研究所紀要』別冊1　一九九九年一月　二四七―二六四頁
○口頭発表
「院政期の高野参詣と泉州地域」　かいづか歴史文化セミナー　一九九九年三月

乾　仁志
○論　文
「『初会金剛頂経』の背景にある大乗仏教　―如来蔵思想との関係を中心に―」　松長有慶編『インド密教の形成と展開』　法蔵館　一九九八年七月　二三九―二六七頁

○口頭発表
「『初会金剛頂経』における利他の思想」　日本仏教学会　一九九八年十月

奥山　直司
○口頭発表
「ムスタン調査の概要報告」　密教研究会学術大会　一九九八年六月
「ムスタンの仏教寺院とその美術―ローマンタンのチャンパ、トゥプチェン両寺を中心に」　密教図像学会　一九九八年十二月
○翻訳・解説
D・スネグローヴ、H・リチャードソン著『チベット文化史』　春秋社　一九九八年四月

室寺　義仁
○論　文
「密教瞑想法の開いた「心」(citta)の神秘」　松長有慶編『インド密教の形成と展開』　法蔵館　一九九八年七月　二六九―二八五頁
「縁起と「滅」―阿難と舎利弗の末裔たち―」　『高野山大学論叢』第三四巻　一―二〇頁

佐藤　正伸
○論　文
「真言宗における灌頂の意義」　『日本仏教学会年報』第六三号　一九九八年四月　一〇七―一二〇頁
「日本密教受容の背景についての一考察　―浄行をキーワードとして―」『弘法大師の思想とその展開　高野山大学密教文化研究所紀要』別冊1　一九九九年一月　三五―六〇頁

○口頭発表
「六字経法について」　日本密教学会第三一回学術大会　一九九八年一〇月

南　昌宏
○論　文
「学制に見る空海入唐前の学問」　『弘法大師の思想とその展開　高野山大学密教文化研究所紀要』別冊1　一九九九年一月　一一七―一三四頁

平成十年度寄贈図書及び交換寄贈雑誌目録

左掲の寄贈図書及び交換雑誌は平成十年四月より平成十一年三月末までの間に登録したものです。御寄贈者の諸機関ならびに諸氏には厚く御礼申し上げます。当研究所の図書充実のため、今後とも一層の御協力と御支援をお願いいたします。

寄贈図書
○一実の道を信ず　恩師小谷喜美先生ご説法集　霊友会運営会議監修　(いんなあとりっぷ社　平成10年9月)　霊友会殿
○インド密教の形成と展開　松長有慶編著　(法蔵館　平成10年7月)　編著者殿
○永平初祖学道用心集　(駒沢大学図書館　影印)　跡部正紀殿
○宮廷の栄華―唐の女帝・則天武后とその時代展　東京国立博物館［ほか］編（NHK　平成10年）　甲田博史殿
○〈企画展〉高野山正智院の歴史と美術　高野山霊宝館編　(高野山霊宝館　平成10年9月)　発行者殿
○現代語訳『三教指帰』　上山春平訳

〈祖典を読もう会　平成10年9月〉　甲田博史殿

○光華叢書3〈女性と仏教〉　光華女子大学・短期大学真宗文化研究所編
〈光華女子大学・短期大学真宗文化研究所　平成10年3月〉　発行者殿

○高野山大学論叢　第33・34巻　高野山大学編
〈高野山大学　平成10年2月、11年2月〉　発行者殿

○高野山大宝蔵展　第19回〈顕教の仏たち〉　高野山霊宝館編
〈高野山霊宝館　平成10年7月〉　発行者殿

○コロンビアの日々―一九六〇年～一九八八年〈伝道参考シリーズ9〉
太田哲三著〈天理大学おやさと研究所　平成10年3月〉　発行者殿

○昭和仏教全集　第6部（真言宗編）1〈宗教的生命の思慕〉　宮坂宥勝著
〈教育新潮社　昭和46年8月〉　甲田博史殿

○昭和仏教全集　第6部（真言宗編）5〈密教の信仰と倫理〉　中野義照著
〈教育新潮社　昭和49年4月〉　甲田博史殿

○昭和仏教全集　第6部（真言宗編）6〈密教の智恵〉　松長有慶著
〈教育新潮社　昭和48年9月〉　甲田博史殿

○昭和仏教全集　第6部（真言宗編）7〈心とすがた〉　新居祐政著
〈教育新潮社　昭和49年11月〉　甲田博史殿

○静　慈円　書・画展作品集　静慈円編〈静慈円　平成10年7月〉　編者殿

○神道古典研究所紀要　第4号　神道古典研究所編
〈神道大系編纂会　平成10年3月〉　発行者殿

○人権啓発推進資料19〈同和局開設15周年記念人権啓発シンポジウム〉
〈高野山真言宗同和局　平成10年7月〉　発行者殿

○碩学　松長有慶年譜・著作目録　松長有慶著
〈法蔵館　平成10年7月〉　著者殿

○善本聚粋　第1巻　高野山大学図書館編
〈高野山大学　平成8年10月〉　編者殿

○善本聚粋　第2巻　高野山大学図書館編
〈高野山大学　平成10年10月〉　編者殿

○蔵訳無量寿経異本校合表〈校本〉
仏教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編
〈仏教大学総合研究所　平成11年3月〉　発行者殿

○中央大学人文科学研究所研究叢書18〈英国ルネッサンスの演劇と文化〉
中央大学人文科学研究所編〈中央大学出版部　平成10年3月〉　編者殿

○中央大学人文科学研究所研究叢書19〈ツェーラン研究の現代〉
中央大学人文科学研究所編〈中央大学出版部　平成10年3月〉　編者殿

○智山事相事典
真言宗智山派興教大師850年御遠忌記念出版事相篇編纂委員会編
〈同御遠忌奉修局　平成10年6月〉　同派宗務庁

○智山伝法院選書　第5号〈祖先崇拝と仏教〉　大塚秀見他著
〈智山伝法院　平成10年12月〉　発行者殿

○チベットの仏教と社会　山口瑞鳳監修
〈春秋社　昭和61年11月〉　甲田博史殿

○東南アジア布教伝道覚書〈伝道参考シリーズ10〉　永尾信雄著
〈天理大学おやさと研究所　平成10年11月〉　発行者殿

○渡宋した天台僧達　日中文化交流史一班　小田切文洋著
〈翰林書房　平成10年3月〉　甲田博史殿

○奈良県・和歌山県の不思議事典　大宮守友、小山誉城編
〈新人物往来社　平成10年11月〉　甲田博史殿

○日本・韓国の古代仏教彫刻　金銅仏　木下耕甫編
〈東北電力　平成11年3月〉　発行者殿

○日本中世古文書フルテキストデータベースの構築方法に関する研究〈一九九四年度～一九九七年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書〉　保立道久他編著
〈保立道久　平成10年3月〉　東京大学史料編纂所殿

○日本の原郷　熊野　梅原猛著　（新潮社　平成7年5月）　甲田博史殿
○ネパールの神々　イシュワリ・カルマチャリヤの作品から
稲村哲也他解説（堤博光　平成2年4月）　甲田博史殿
○ハンビッツ文化財団蔵チベット仏教絵画集成　タンカの芸術
第1巻〈日本語版〉　田中公明編
（平成元年9月　ハンビッツ文化財団）　田中公明殿
○抜萃のつゞり　58　熊平製作所編
（熊平製作所　平成11年1月）　発行者殿
○パーリ学仏教文化学　11　パーリ学仏教文化学会編
（パーリ学仏教文化学会　平成10年5月）　高野山大学殿
○ブッダ展　大いなる旅路　東武美術館他編
（平成10年　ＮＨＫ）　甲田博史殿
○松長有慶著作集　第1～5巻　松長有慶著
（平成10年4月　法蔵館）　高野山大学殿
○密教文化　195～199、200　密教研究会編
（平成8～10年　密教研究会）　発行者殿
○無量寿経論校異　仏教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班
（平成11年1月　仏教大学総合研究所）　発行者殿
○「瞑想の館」と「瞑想美の館」の仏画について　田中公明解説
（利賀国際山村文化体験村）　甲田博史殿
○モンゴル秘宝展　チンギス・ハーンと草原の記憶　日本経済新聞社編
（平成8年　日本経済新聞社）　甲田博史殿
○歴史資料　高野版板木調査報告書　高野版板木調査委員会編
（平成10年3月　高野町）　高野町教育委員会殿
○歴史資料　高野版板木報告書ＣＤ-ＲＯＭ版　高野版板木調査委員会編
（平成10年3月　高野町）　高野町教育委員会殿
○歴史情報データベース統合システム構築の研究〈平成7年度科学研究費補助金一般研究（Ａ）研究成果報告書〉　石上英一他編著
（平成8年2月　石上英一）　東京大学史料編纂所殿
○和歌山日本一物語　和歌山放送著
（平成10年4月　和歌山放送）　甲田博史殿
○Yasuhiro Sueki, *Bibliographical Sources for Buddhist Studies : from the Viewpoint of Buddhist Philology,* Bibliographia Indica et Buddhica Ⅲ. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies, 1994.　発行者殿
○Bla ma'i rnal 'byor dang i dam khag gi bdag bskyed sogs zhal 'don gces btus bzhugs. Dharamsala: Tibetan Cultural Printing Press, 1994.　甲田博史殿
○Sharpa Tulku, Michael Perrott, *Manual of Ritual Fire Offerings*. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives, 1987.　甲田博史殿
○Tadashi Yoshida, Hiroki Oka, ed., *Facets of Transformation of the Northeast Asian Countries,* Northeast Asian Study Series 1. Sendai: Center for Northeast Asian Studies Tohoku University, 1998.　発行者殿
○Kyosuke Terayama, ed., *Russia and Japan: A Historical Survey,* Northeast Asian Study Series 2. Sendai: Center for Northeast Asian Studies Tohoku University, 1998.　発行者殿
○International Research Center for Japanese Studies, *Nichibunken Japan Review: No.10.* Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 1998.　発行者殿
○Korean Buddhist Reseach Institute, *Son Thouget in Korean Buddhism.* Seoul: Dongguk University Press, 1998.　発行者殿
○Masahide Mori, *Study of the Vajrāvali-Nāma-Maṇḍalopāyikā.* Koyasan: Masahide Mori, 1998.　著者殿
○Oyasato Research Institute Tenri University, *Tenri Journal of Religion; No.26.* Tenri: Tenri University Press, 1998.　発行者殿

交換寄贈雑誌

1 愛知学院大学文学部紀要〈第28号〉
愛知学院大学文学会（同会・平成11年3月）

2 あふひ・AOI〈第4号〉
京都産業大学日本文化研究所（同研究所・平成10年9月）

3 アジア・アフリカ文化研究所研究年報〈第32号（一九九七年度）〉
東洋大学アジア・アフリカ文化研究所編（同研究所・平成10年3月）

4 アジア研究所紀要〈第24号〉
亜細亜大学アジア研究所編（同研究所・平成10年3月）

5 アジア文化研究〈別冊8（アジアの金属職人文化と近代化）〉
国際基督教大学アジア文化研究所編（同研究所・平成10年3月）

6 叡山学院研究紀要〈第21号〉　叡山学院編（同学院・平成11年1月）

7 大倉山論集〈第42輯〉
大倉精神文化研究所編（同研究所・平成10年3月）

8 大谷大学真宗総合研究所研究紀要〈第15号〉
大谷大学真宗総合研究所編（同研究所・平成10年3月）

9 かがみ〈第32、33合併号〉　大東急記念文庫（同文庫・平成10年3月）

10 神田外語大学紀要〈第10、11号〉
神田外語大学編（同大学・平成10年3月、11年3月）

11 九州大谷研究紀要〈第25号〉
九州大谷学会編（九州大谷短期大学内九州大谷学会・平成11年3月）

12 教化研修〈第42号〉
駒澤大学内曹洞宗教化研修所（同研修所・平成10年3月）

13 京都産業大学日本文化研究所紀要〈第3号（一九九七年度）〉
京都産業大学日本文化研究所編（同研究所・平成10年3月）

14 京都女子大学宗教・文化研究所紀要〈第11号〉
京都女子大学宗教・文化研究所編（同大学・平成10年3月）

15 紀州経済史文化史研究所紀要〈第18号〉
和歌山大学紀州経済史文化史研究所（同研究所・平成10年3月）

16 尭栄文庫研究紀要〈第1号〉
親王院尭栄文庫編（同文庫・平成9年9月）

17 光華女子短期大学研究紀要〈第36集〉
光華女子短期大学編（同大学・平成10年12月）

18 光華女子大学研究紀要〈第36号〉
光華女子大学編（同大学・平成10年10月）

19 皇学館大学神道研究所紀要〈第14輯〉
皇学館大学神道研究所編（同研究所・平成10年3月）

20 高野山大学大学院紀要〈第2号〉
高野山大学大学院文学研究科編（同文学研究科・平成10年2月）

21 国際日本文学研究集会会議録〈第21回（一九九七）〉
国文学研究資料館編（同資料館・平成10年10月）

22 国際仏教学大学院大学研究紀要〈第1号〉
国際仏教学大学院大学（同大学・平成10年3月）

23 国士館大学文学部人文学会紀要〈第30号〉
国士館大学人文学会編（同会・平成9年10月）

24 嵯峨美術短期大学紀要〈第23、24号〉
嵯峨美術短期大学編（同大学・平成9年12月、10年12月）

25 種智院大学密教資料研究所紀要〈創刊号〉
種智院大学密教資料研究所編（同研究所・平成10年3月）

26 史境〈第35、36号〉　歴史人類学会編
（筑波大学歴史・人類学系内歴史人類学会・平成9年9月、10年3月）

27 信愛紀要〈第39号〉
和歌山信愛女子短期大学学術研究会編（同会・平成11年3月）

28 真宗文化〈第7号〉

光華女子大学・光華女子短期大学真宗文化研究所
（同研究所・平成10年7月）

29 城西大学国際文化研究所紀要〈第4号〉
城西大学国際文化研究所編（同研究所・平成10年7月）

30 人文研紀要〈第31～33号〉
中央大学人文科学研究所（同研究所・平成10年9月）

31 西山学報〈第46号〉
西山短期大学（同大学・平成10年5月）

32 禅研究所紀要〈第26、27号〉
愛知学院大学禅研究所（同研究所・平成10年3月、11年3月）

33 善通寺教学振興会紀要〈第4号〉
善通寺教学振興会（同会・平成9年12月）

34 中央学術研究所紀要〈第27号〉
中央学術研究所編（同研究所・平成10年12月）

35 中央大学人文科学研究所年報〈第19号（一九九七）〉
中央大学人文科学研究所（同研究所・平成10年3月）

36 地域と社会〈創刊号〉
大阪商業大学比較地域研究所編（同研究所・平成11年2月）

37 筑紫女学園短期大学紀要〈第34号〉
筑紫女学園短期大学編（同大学・平成11年1月）

38 筑紫女学園大学紀要〈第11号〉
筑紫女学園大学編（同大学・平成11年1月）

39 智山教化センター年報〈第2号〉
智山教化センター（同センター・平成10年6月）

40 鶴見大学仏教文化研究所紀要〈第3号〉
鶴見大学（同大学・平成10年4月）

41 天台学報〈第40号〉
天台学会編（叡山学院・平成10年11月）

42 天理大学おやさと研究所年報〈第4号（一九九七）〉
天理大学おやさと研究所編（同研究所・平成10年3月）

43 東京成徳大学研究紀要〈第5号〉
東京成徳大学編（同大学・平成10年3月）

44 東京大学宗教学年報〈15〉
東京大学宗教学研究室編（同研究室・平成10年3月）

45 東京大学史料編纂所研究紀要〈第8号〉
東京大学史料編纂所編（同所・平成10年3月）

46 東京大学史料編纂所報〈第32号（一九九六年度）〉
東京大学史料編纂所編（同所・平成10年3月）

47 東京立正女子短期大学紀要〈第25、26号〉
東京立正女子短期大学編（同大学・平成9年12月、10年7月）

48 東西南北〈一九九八〉
和光大学総合文化研究所編（同研究所・平成10年3月）

49 東北アジア研究〈第2号〉
東北大学東北アジア研究センター広報委員会編
（同センター・平成10年3月）

50 東北学院大学東北文化研究所紀要〈第30号〉
東北学院大学東北文化研究所編（同研究所・平成10年3月）

51 東北学院大学論集〈歴史学・地理学　第31号〉
東北学院大学学術研究会（同研究会・平成11年2月）

52 東洋学研究〈第35号〉
東洋大学東洋学研究所（同研究所・平成10年2月）

53 東洋学論叢〈23〉
東洋大学文学部印度哲学科編（同大学文学部・平成10年3月）

54 東洋の思想と宗教〈第15号〉
早稲田大学東洋哲学会編（同学会・平成10年4月）

55 同朋大学仏教文化研究所紀要〈第17号〉

56 同朋大学論叢〈第78、79号〉　同朋大学仏教文化研究所編（同研究所・平成10年4月）
57 奈良大学紀要〈第27号〉　同朋大学同朋学会（同学会・平成10年11月、11年3月）
58 成田山仏教研究所紀要〈第21号〉　奈良大学編（同大学・平成11年3月）
59 日文研〈19、20号〉　成田山仏教研究所（同研究所・平成10年3月）
60 日本研究〈第18集〉　国際日本文化研究センター編（同センター・平成10年2月、8月）
61 日本語と日本語教育〈第26号〉　国際日本文化研究センター編（同センター・平成10年9月）
62 比較文化〈第12号〉　慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター編（同センター・平成10年3月）
63 福井県立大学論集〈第13号〉　中央学院大学比較文化研究所編（同研究所・平成10年3月）
64 仏教学報〈第34輯、韓文〉　福井県立大学編（同大学・平成10年7月）
65 仏教研究〈第27号〉　東国大学校仏教文化研究院編（同研究院・一九九七年12月）
66 仏教大学総合研究所紀要〈第5号〉　国際仏教徒協会編（同協会・平成10年3月）
67 仏教大学総合研究所紀要〈別冊　宗教と政治〉　仏教大学総合研究所編（同研究所・平成10年3月）
68 仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書〈第28冊〉　仏教大学総合研究所編（同研究所・平成10年3月）
69 仏教文化研究論集〈第2号〉　仏教美術研究上野記念財団助成研究会編（同会・平成10年3月）
70 仏教文化論集〈第8輯〉　東京大学仏教青年会（同会・平成10年2月）
71 平和と宗教〈第17号〉　川崎大師教学研究所編（川崎大師平原寺・平成10年12月）
72 北陸宗教文化〈第10号〉　庭野平和財団平和研究会編（同財団・平成10年12月）
73 密教学研究〈第30号〉　金沢大学文学部比較文化学研究室内北陸宗教文化学会（同学会・平成10年3月）
74 民具マンスリー〈第31巻　1～10、11・12合併号〉　日本密教学会（同学会・平成10年3月）
75 龍谷史壇〈第109、110合刊号　福嶋教授華甲記念特集〉　神奈川大学日本常民文化研究所編（同研究所・平成10年四月～11年2月）
76 龍谷大学論集〈第453号〉　龍谷大学史学会編（同学会・平成10年3月）
77 立正大学人文科学研究所年報〈第35号〉　龍谷学会編（同学会・平成11年3月）
78 歴史と民俗〈15〉　立正大学人文科学研究所編（同研究所・平成10年3月）
　　神奈川大学日本常民文化研究所編（平凡社・平成11年3月）

平成十一年密教文化研究所だより

共同研究「密教の形成と流伝に関する研究会」では、二年間の研究成果がまとめられ、平成十二年二月に『密教文化研究所紀要』別冊2「密教の形成と流伝」として刊行した。掲載論文は次のとおり。

生井智紹「如来秘密―三密行との関わりから―」

大塚伸夫「『華厳経』入法界品と『金剛手灌頂タントラ』」
乾　仁志「『初会金剛頂経』の基本にある如来蔵思想」
室寺義仁「金剛喩定について」
森　雅秀「オリッサ州出土の四臂観音―密教図像の成立に関する一考察―」
奥山直司「埋蔵と化身―インド後期密教の形成と展開に関する一考察―」
野口圭也「密教におけるサハジャ思想の形成」
山下博司「密教と南インド―古代インドの地域区分の問題にも触れて―」

共同研究「弘法大師の思想とその展開に関する研究会」は、昨年度公表された研究成果を更に深めるべく、高木所長、山陰所員に委託研究員として岩崎日出男氏（園田学園女子大学助教授）を加え、研究会を重ねている。平成十一年度は①奈良末・平安初期の仏教界と社会情勢、②当時の中国の仏教界・思想界、③『聾瞽指帰』における仏教理解などを主要テーマに、合計五回開催された。研究発表者と題目は次のとおり。

平成11年7月21日　岩崎日出男「不空の時代の内道場について」
10月4日　高木　諦元「婆羅門僧正と瑜伽密教」
11月15日　高木　諦元「大安寺戒明と釈摩訶衍論」
平成12年1月31日　岩崎日出男「不空入寂から恵果伝法にいたるまでの密教の現状について」
2月29日　山陰加春夫「中世『寺院縁起』の新・史実化―善通寺・珍皇寺の場合―」

京都にある日本キリスト教協議会宗教研究所の客員研究員ウィリアム・ロンド氏が平成十一年七月一日から同三十一日まで、密教文化研究所受託研究員として受入れられた。専門は日本史である。

本研究所専任研究員北原裕全氏は、二年間にわたる海外留学を終えて帰国した。その報告は下記のとおり。

インド留学報告

専任研究員　北原　裕全

小職は、密教文化研究所長ならびに高野山大学長の承認を受けて、平成九年七月より同十一年七月までの二カ年間、インド国プネー大学高等サンスクリット研究所（CASS）においてインド政府奨学金ならびに高野山勧学財団貸与奨学金をえて在外研究（海外留学）をおこなう機会をえました。ここにその概況を記して留学の報告をいたします。

◇経緯と目的◇

私が高野山大学大学院博士課程にておこなった研究は、ラトナキールティの唯識説についての思想研究でした。その成果は平成七年に高野山大学に提出した学位論文「『多様不二証明論』の研究」としてまとめましたが、これが目下の研究課題へと展開する要因となりました。現今の研究課題は、西暦六世紀から十一世紀にかけて仏教唯識論者を中心に中世インド思想界でおこった有形象・無形象の論争をめぐる諸相の解明です。ジニャーナシュリーミトラの *Sākārasiddhiśāstra* がそのための主たる資料となります。本書にはチベット訳漢訳等の副次的資料の存在は伝えられず、文献学による批判的研究も、またそれにもとづいた現代語訳も部分的におこなわれているものを除いて決定的なものは存在していません。本書の解読研究の作業をすすめていくにあたり、論争上関連する文献資料ないし議論を探索する一方、わずかな例外を除いてパラレルな議論を回収できない大部分の論述において、背景が明瞭とならないまま作者の微妙にして多弁な議論を追わねばならず、浩瀚なこの論

書の解読作業は読み進むにつれ困難の度を深めていきました。当論師の重要性は学界でも認識され、A.タクル、M.ハーン、E.シュタインケルナー、筧無関、赤松明彦、桂紹隆、谷貞志、狩野恭、沖和史らをはじめとして各インド学仏教学者がそれぞれジニャーナシュリーミトラの韻律論、アポーハ論、刹那滅論証、自在神論証批判、そして有形象論証の各論について、ダルマキールティ思想からの展開として、あるいはバラモン諸派との対論、ラトナキールティの論述を指針とする等の方法的視点から論及し研究に先鞭をつけています。が、その有形象論についてみればその文献ならびに思想の解明はさらに今後に一層の進展をみることが望まれます。

こうした状況のもとで、サンスクリット語で著されたこの大部な論を、大きな期待をかけられない他資料に依らず可能なかぎり読みすすんで、まず全体像を捉える必要が感じられました。これに応えてくれる方途の一つはサンスクリットに熟達したインド人の優れた学者に助力を求めることでした。西洋風の学問方法が世界中の学界を席巻するなかで、インド古典文化の媒体語であるサンスクリットを準母語として読み書きし、のみならず会話さえ自由におこなう伝統的学問をも修めたインド学者はインド本国にも減ってきており、そうした学匠に就ける貴重な機会は将来的に稀少なものとなりつつあります。日本にいながらそうした機会をもつことは当時も今も望めないものでした。

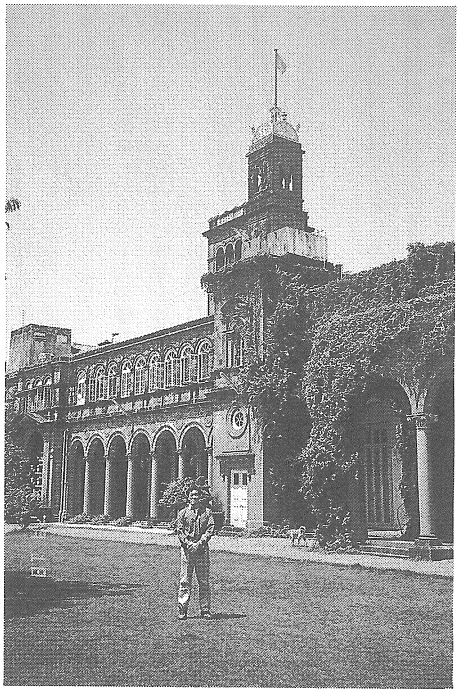
また、本書を研究するにあたって、資料批判に関する問題が生じてきます。同書の校訂は *Tibetan Sanskrit Works Series* に収められた出版本があります。この唯一の版本は、存在の知られている現存する唯一の写本の写真版にもとづくものです。そこには、本文の議論の難解さと相俟って、第一次資料となるテキスト批判の信頼性に関して疑念を生じさせる余地を多分に残しています。適正に本書の研究をすすめるためには、オリジナル資料（当該写本の写真資料）の参照と検討をすることが是非とも必要でした。ところがその資料は、関係機関のレジスタラーが説明したような所蔵機関の方針と、当該機関の現実的運営にかかる推測される何らかの制約的状況とによって、これまで学界の高まる要望に比して入手が困難で、閲覧することさえも容易と言えない状況にありました。とりわけ、付随資料となるラトナキールティの原資料については、A. Thakur 教授が校訂（一九五〇年代）して出版し一度大幅な改訂（一九七五年）をして以後、内外の学界で参照できたとの報告を聞かず、ある種稀覯書の部類に属するものとなっています。学界に風聞されるいくつかの前例ならびに個人的な経験が示していたように、一研究者が郵便を通して間接的に海外からおこなう請求交渉はその効果がまったく期待できませんでした。打開には、インド国内の研究機関によって公的に保証された身分、そしてインド人学者との学問的連携がある程度必要とみられました。インド在外研究（留学）は上記のことごとを可能にしてくれるものとして発起され、その目的意識に沿って志すことになります。

◇ 所属の研究機関 ◇

所期の目的に適い、留学するに適当だと思われる研究機関をプネー大学（旧名プーナ大学）に選定し、インド政府奨学金プログラム（Indian Government Scholarship Programme）の審査選抜を経てこれを取得し、当地に留学いたしました。また学資金に関しては、幸いに高野山勧学財団から貸与奨学金を恵与されました。

プネーは人口二百九十万人（一九九七年現在）、州都ムンバイ（旧ボンベイ）に次ぐマハーラーシュトラ州第二の都市です。インド西方海岸に南北にのびる西ガーツ山脈を越えたデッカン高原に位置し、標高が五八〇メートルほどの地にあるため酷暑をほこるインドでも比較的気候が穏やかで水質もよく、学問、研究に適したところとなっています。近現代にわたりインド学・言語学などの分野で業績をあげてきた、デッカン=カレッジ、バンダルカル東洋学研究所、アーナンダ=アーシュラマなどの機関が所在し、歴史的にヴェーダ学・サンスクリット学を培ってきました。P.V.アプテをはじめ高名なサ

ンスクリット学者、V.V.ゴーカレー、P.V.パパットといった仏教学者らを排出し、アプテのサンスクリット辞書も当地で編まれています。デリーが政治の中枢なら、ボンベイがビジネスのセンター、そして教育研究の中心はプネーである、というのがインド人の共通した見方になってきています。それを裏付けるように市内各所にはインド学に限らず各種の学校、大学（カレッジ）、理化学・軍事関連の研究所等が多数存在し、インド全土から学生が集う一方、大学への外国人留学生受け入れの数でもプネー大学が六十二カ国から二千人以上を受け入れてインド一となっています。日本の名古屋大学と交換留学のプログラムがあることは知られていますが、今年金沢大学とも同様なプログラムの提携がなされました。スイスのローザンヌ大学、カナダのカルガリー大学、アメリカのペンシルヴェニア大学とも同じプログラムがある他、ドイツ、オーストラリア、イランの大学とも提携があるとのことです。また、私の在留中には個人的にハーバード、ケンブリッジ、U.C.バークリー、そして東京大学からの大学院生がそれぞれの専門からテキストの精読に、あるいはサンスクリット学習にと訪れていました。



プネー大学本館（メイン・ビルディング）にて

私はインドにはムンバイに一九九七年（平成九年）七月二十五日に入り、翌二十六日（日曜日）にプネーに到着しました。プネー大学への所定の登録手続きをとるかたわら、同大学教授で高等サンスクリット研究所長（Director, CASS（Centre of Advanced Study in Sanskrit））のV.N.ジャー教授（Prof. Dr. Vashishtha Nardyan Jha）に会い、私の研究の課題と計画等の概要を話したところ快くガイダンスを引き受けてくださいました。そして相談の結果、同研究所に登録し、この課題をPh. D. リサーチワークとしてとりかかることになりました。ところで私はすでに課程を修了し博士（仏教学）の学位を取得していたので、これに相当するPh. D. を追求する必要は必ずしもありませんでしたが、彼の地には正式なPost Doctoralコースが設けられていないこと、政府奨学金を支給するICCR（Indian Council for Cultural Relations, インド政府外務省内協議会）が学位取得を留学成果として期待していると奨めるジャー教授の意見もあって、この研究を第二のPh. D. ワークとして執り行うことに決まったという次第です。

ジャー教授が所長を務める高等サンスクリット研究所は、サンスクリット学の分野における高度な研究を促進することを目的として一九六四年に独立の研究機関としてプネー大学内に設立されました。一教授（1 Professor）、五助教授（5 Readers）、七研究助手（7 Research Associates）、二人の大学研究補助金研究員（2 Research Scientists of University Grant Commission of India）の研究陣を構え、独自の蔵書施設を有しています。Veda, Vyakarana, Nyaya などの分野で百を越える出版があり、百名を越える内外の研究者を育成してきているとのことです。写本学（Manuscriptology）のコース（Certificate, Diploma）を常設するほか、年間で一つの国際的な、十五前後の国内的な各

種セミナーを組織運営します。数週間から一ヶ月の長さでもたれるセミナーには毎回インドの各地から研究者が参加して活況を呈していました。

◇ 研究活動の概要 ◇

文献解読の基礎となるのが文法の知識であることは異論のないところでしょう。プネー大学のサンスクリット学科には、インド産サンスクリット文法学（Vyakarana）の重要テキストである *Siddhāntakaumudi* の講義がありました。同書はインド産の伝統的な文法学（パーニニアンの文法学）にそってサンスクリット学習を開始するうえで最適の書とされ、同大学ではM.A.コースの授業にあり、文法学専攻の学生には必修の科目となっています。私の滞在中には継続的に格（karaka）のセクションを講読していて、これを受講して益されました。日本に支配的なヨーロッパの文法学にならって組み直したサンスクリット文法ではない、インド産文法学をインド人教師に習う機会は日本では得られないことであり、インドの伝統的サンスクリット読解法の一端を学んで益されるところがありました。また、文法学に関して当学科ではProfessorの許可をえて優秀なインド人学生が他の学生や留学生をチューターすることがあり、これによって私もVaradarāja の *Laghu-siddhāntakaumudi* をともに読む機会を持ちました。

テキスト研究の主要対象としたジニャーナシュリーミトラの *Sākāravasiddhi-śāstra* の講読は一九九八年（平成十年）一月からジャー教授のオフィスで始まりました。のち、来客等による中断の多いことを懼れて教授の自宅に場を移し、夏期の長期休暇や教授のとりわけ多忙な時期をさけながら、週に一、二度の頻度で各一時間半ほどマンツーマンによる読み合わせをおこなっています。ほぼ第一章を読むことができました。学術的成果についてはしかるべき機会をえて将来的に公表していく予定です。

V.N.ジャー教授はその新インド論理学（Navya Nyaya）に関する深い学識をもって知られますが、Ph.D.論文は、S.D.ジョーシー博士に就いて作成したリグ=ヴェーダ“pada-pāṭha”の言語学的解析でした。なおも、ヴェーダ、サンスクリット文法学（Vyakarana）、バラモン祭式学（Mimamsa）、サンスクリット修辞学（Alaṅkaraśastra）といった領域にも関心が深く、そのことは教授がKāvya Tirtha, Veda Tirtha, Vyakarana Tirtha の伝統学問の称号をお持ちであることにも窺われます。広い学識に裏付けられた伝統的パンディットの風格をもっておられました。ダルマキールティの *Sambandha-parīkṣā*（『関係の考察』）に関する研究をなされたほかは、仏教を専門にしてはいらっしゃいませんでしたが、インド論理学にとどまらずサンスクリット文学、文法学にまで造詣の深いことは、教授が唯識学に関する日本の学界等の成果を借りずに当該のサンスクリットテキストをどのように読解していくのかという津々たる興味を私におこさないではおきませんでした。

Sākāravasiddhi-śāstra において作者ジニャーナシュリーミトラはニヤーヤ学派の論師たちを盛んに論駁します。唯心論を立てる者にとっては、ニヤーヤなどの外界実在論は対極にたつ学理であり、必然的に主要な論敵となります。ニヤーヤ学説への反駁を多く含むこの書を、ニヤーヤ学の伝統を継ぐ学者に一緒に読んでもらえることになったのは、いわく奇しき因縁でした。つぎのようなことがありました。私ごとながら真言宗に僧籍がある私は信仰の面では仏教徒です。けれども、学者としては価値中立的にテキストを読み客観的立場から研究対象を見るべきであるとの考えがありました。それは文献学の方法をもって思想を研究する上で自明な公準であり、すでに普遍的な了解さえできているとする思いが私にはありました。ところが、教授につぎのように言われたことがありました、「ニヤーヤ学派にとって最大最強の論敵は仏教徒だ。仏教徒とニヤーヤ学派が議論をかさねてインド論理学は発展してきた。自信をもって仏教徒の説を主張しなさい。」それは、ジニャーナシュリーミトラのある論理を私が批判的に評した際のことです。新論理学を専門とし、インド論理学の過去から将来にわたる発展というものを念頭におかれた発言と受け取りました。古典学に停滞することを良しとしないバラモンの論理学

の伝統がいまここに生きている、と感じて衝撃を受けました。論争論議に負けた者は頭が七つに割れるとされたのはウパニシャッド以来のインド哲学の伝統です。ナイヤーイカ（ニヤーヤ学徒）とバウッダ（仏教徒）とが対論している往昔の緊張感がよみがえりました。学問のなかに息づく文化、民族文化に根差して育まれてきた学問文化というものの存在を再発見したわけです。文法学の授業中には講師が学生に「あなた方は *Grammarian*（文法学派の徒）なのですよ。」（他のダルシャナを意識した発言と思われる）と再三言い聞かせることがありました。また文法学の領域では、インド人学者によってパーニニの文法体系の不備を整合させる補注的ルールを発見することがテーマとなったりします。インドにインドの学問文化があるとすれば、対して西洋には西洋の個別性があるはずです。近代以後西洋に多くを負った日本にそういう独自の学問文化と呼べるようなものが存続しているか、あってもそれと意識し了別できているかは疑問ですが。学問がその本性において普遍性を求めようとすることとは別に、その方法であれ目的であれ、学問が民族的価値観もしくは人種的思考様式ないし文化全般と無関係ではありえないという現実を視野にいれて研究活動をおこなうことも、学問の普遍性を追求するとなれば必要なことと認識しました。一体に普遍性ということが実際に可能なことであるのかどうかということも含めて、学問における「普遍」の意味するところを考える重大な契機になりました。

奇遇なことに、プネー留学中に、ラトナキールティに関心をもって研究を進める同世代のアメリカからの研究者と遭遇しました。彼はP．パティールというハーバード大学の大学院生で哲学と物理学に研究歴をもち、ラトナキールティを主な資料として神の存在の意味をテーマにPh．D．論文を用意している新進気鋭の研究者です。彼の提案で私とラトナキールティの多様不二論を読む機会を持ちました。彼は、私がすでにラトナキールティの *Citrādvaitaprakāśavāda* を研究して学位を取得したということを知ってショックを受けた様子でしたが、読み合わせと意見交換を重ねて研究の新たな方向性を見いだしていたようすです。彼はハーバードでナガトミ教授とともにラトナキールティのいくつかの著作を読んだということでした。

◇ 写本類の参照と蒐集について ◇

ジニャーナシュリーミトラ著作集の校訂テキストに原典批判上検討の余地があることは上述の通りです。ラトナキールティ著作集に関しても事情は同様で、底本にされた写本写真を調査参照することが留学中の目的のひとつとなっていました。両資料あわせ調査をおこなうためにビハール州パトナ市のビハール学術研究協会（Bihar Research Society）を訪ねました。

当協会には、よく知られるように一九三〇年代にラーフラ＝サーンクリトヤーヤナ三蔵法師（Tripiṭaka-ācārya）がチベット各地の仏教僧院を調査し、各所に伝えられたチベット語等による仏教典籍、あるいはサンスクリット原典の写本を写真撮影して蒐集した資料、ならびに仏具等が多数収蔵されています。

気懸かりであった参照の許可も、現地でK．P．ジャヤスワル研究所所長で同協会のコミッティーメンバーでもあるJ．パンデーイ博士の諒解をうることができ、取ることができました。当該資料の参照調査は一九九八年四月二十六日から同年五月二十一日の約一ヶ月間、また翌年の六月六日から同月十二日までの二度にわたっておこない、十分にこれらを参照することができました。仔細なテキスト批判については今後にわたって継続的におこない、必要な点は公表していく予定です。

密教文化研究所構成員名簿（平成十一年十二月現在）

所　長　高木　諦元（文学部教授）
専従研究所員　高木　諦元（文学部教授）
〃　森　雅秀（文学部助教授）
兼任研究所員　山陰加春夫（文学部教授）
専任研究員　北原　裕全
委託研究員　岩崎日出男（園田学園女子大学国際文化学部助教授）
顧　問　松長　有慶（文学部教授）
研究所課長補佐　甲田　博史
専門員　甲田　博史
書　記　日下　義眞
中原　祥徳
三星みや子（非常勤）

【教職員人事】

○**退　任**　平成十一年三月三十一日付
高木　諦元　所　長
生井　智紹　兼任研究所員
山陰加春夫　〃
乾　仁志　〃
奥山　直司　〃
室寺　義仁　〃
佐藤　正伸　〃
南　昌宏　〃
北原　裕全　専任研究員
星宮　智光　委託研究員
岩崎日出男　〃
山下　博司　〃
野口　圭也　〃
大塚　伸夫　〃

○**就　任**　平成十年四月一日付
高木　諦元　所　長
山陰加春夫　兼任研究所員
北原　裕全　専任研究員
岩崎日出男　委託研究員

高野山大学密教文化研究所規程

（総則）

第一条　この規程は、高野山大学（以下「本学」という。）学則第三九条に基づき、密教文化研究所（以下「研究所」という。）の目的及び組織等に必要な事項を定めるものである。

（目的）

第二条　この研究所は、真言密教の蘊奥を究め、これを顕揚すると共に社会に貢献するを以って目的とする。

（事業）

第三条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

①　弘法大師の著作研究
②　真言密教の研究並びに調査
③　密教文化に関する共同研究
④　国内外の研究機関並びに研究者との学術交流
⑤　研究資料の収集及び整理並びに提供
⑥　研究成果の刊行並びに公表
⑦　研究会及び講演会の開催
⑧　密教に関する情報サービス
⑨　その他の必要な事業

（研究組織）

第四条　研究所に次の研究部門を置く。

①　基礎研究部門
②　総合研究部門

2　基礎研究部門においては、日本及びアジア地域における密教の基礎的研究並びに基礎資料の調査研究を行う。

3　総合研究部門においては、密教の思想と文化並びに関連領域について総合的な比較研究を行う。

（職員組織）

第五条　研究所に次の職員を置く。

①　研究所長
②　研究所員　若干名
③　研究員　若干名
④　第九条に規定する事務職員　若干名

（研究所長）

第六条　研究所長は、本学専任の教授の中から学長が推薦し、理事長が任命する。

2　研究所長の任期は三年とし、再任を妨げない。

3　研究所長は、学長の下に研究所に関する事項を掌理する。

（研究所員）

第七条　研究所員は、本学専任の教育職員の中から、研究所長が文学部長と協議の上推薦し、学長が教授会の議を経て委嘱する。

2　研究所員を専従研究所員及び兼任研究所員とする。

3　専従研究所員は、主として研究所の研究及び事業に従事する。

4　専従研究所員の任期は二年とし、再任を妨げない。

5　専従研究所員の担当する授業時間数等については、文学部長又は文学研究科長が研究所長と協議の上、学長がこれを定める。

6　兼任研究所員は、本務に兼ねて研究所の特定課題の研究又は事業に従事する。

7　兼任研究所員の任期は一年とし、再任を妨げない。

（研究員）

第八条　研究員を専任研究員、委託研究員及び受託研究員とする。

2　専任研究員は、学長が研究所長と合議の上、教授会の議を経て任用する。

3　専任研究員の任期は一年とし、本学が必要と認める場合には、再契約をすることがある。

4　専任研究員は、研究所員の指導の下に研究及び事業に従事する。

5　委託研究員は、研究所長が推薦し、学長が委嘱し、教授会に報告する。

6　委託研究員の委託期間は一年とし、本学が必要と認める場合には、再委嘱をすることがある。

7　委託研究員は、研究課題に基づいて研究を行う。

8　受託研究員の受け入れについては、学長が研究所長と合議の上決定し、教授会に報告する。

（事務組織）

第九条　研究所の事務は、研究所課がつかさどる。

2　研究所課に課長、専門員及びその他の事務職員を置く。

3　事務職員は、研究所の事務又は事業に従事する。

4　専門員は、研究所長及び研究所課長の下に研究所の事業に関する特殊な専門的知識、経験等を必要とする分野の業務を直接処理する。

（運営）

第一〇条　研究所の運営を協議するために研究所に協議会を置く。

2　研究所協議会に関する事項は、別に定める。

（顧問及び賛助員）

第一一条　研究所に顧問及び賛助員を置くことができる。

2　顧問及び賛助員は、研究所協議会の議を経て学長が委嘱する。

（学則等の準用）

第一二条　この規程に定めるもののほか、研究所の運営に関し必要な事項は、本学の学則及びその他の本学の諸規程を準用する。

（規程の改廃）

第一三条　この規程の改廃は、学長が研究所長とはかり教授会の議を経て、理事会の承認を得るものとする。

附　則

一　この規程は昭和三三年四月一日より施行する。

一　この規程は昭和五一年四月一日より施行する。

一　この規程は昭和五九年四月一日より施行する。

一　この規程は平成二年二月一六日より施行する。

一　この規程は平成三年二月一八日より施行する。

一　この規程は平成三年四月一日より施行する。

一　この規程は平成五年四月一日より施行する。

一　この規程は平成七年五月一一日施行し、平成七年四月一日より適用する。

一　この規程は平成八年四月一七日施行し、平成八年四月一日より適用する。

『密教文化研究所紀要』編集委員会規程

第1条　密教文化研究所（以下「研究所」という。）に、『密教文化研究所紀要』（以下「紀要」という。）編集委員会（以下「編集委員会」という。）を設ける。

第2条　編集委員会は、次の委員をもって構成する。
(1)　研究所長
(2)　専従研究所員
(3)　「紀要」編集担当者

2　編集委員長は研究所長がこれにあたる。研究所課長は、幹事として編集委員会の事務を処理する。

第3条　編集委員会は研究所長が招集し、その議長となる。議長に事故あるときは、互選によって議長を選出する。

第4条　編集委員会は、次の事項を審議し、研究所協議会に報告する。
(1)　「紀要」に寄稿された原稿の掲載の可否および掲載の時期の決定。
(2)　「紀要」寄稿者への補筆および補正の要請。

第5条　委員の任期は1年とする。ただし重任を妨げない。

第6条　この規程の改廃は、研究所協議会の議を経て、研究所長が決定する。

附　則

1　この規程は、平成九年四月一日から施行する。

『密教文化研究所紀要』寄稿規程

第1条　『密教文化研究所紀要』（以下「紀要」という。）は、日本およびアジア地域などにおける密教の思想と文化に関する研究論文、研究ノート、研究資料、書評などを掲載発表することにより、密教文化の研究の発展に寄与することを目的とする。

第2条　「紀要」に寄稿することができる者は、次のとおりとする。
(1)　研究所長
(2)　研究所員
(3)　研究員
(4)　編集委員会が適当と認める者

第3条　原稿は、原則として四百字詰原稿用紙七十枚以内とする。

第4条　原稿は完全原稿とする。執筆者校正は再稿までとし、校正時の大幅な改変・追加等は認めない。

第5条　寄稿された原稿は、査読委員会の査読を経て、編集委員会が掲載の可否および掲載の時期を決定する。また、編集委員会は、寄稿者に補筆および修正を求めることができる。

第6条　原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。

第7条　寄稿者には、掲載誌二部および抜刷三十部を贈呈し、その経費は研究所が負担する。

附　則

1　この規程は、平成九年四月一日から施行する。

『密教文化研究所紀要』査読委員会規程

（設置）
第1条　密教文化研究所（以下「研究所」という。）に、『密教文化研究所紀要』査読委員会（以下「査読委員会」という。）を設置する。

（目的）
第2条　査読委員会は、寄稿論文原稿を査読し、紀要の学術的価値の向上を計ることを目的とする。

（構成）
第3条　査読委員会は、研究所長を委員長とし、研究所員若干名の委員をもって構成する。
2　委員長は、寄稿論文のテーマにしたがって、研究所員以外から委員を委嘱することができる。

（任務）
第4条　委員は、寄稿された論文原稿について査読し、その学術的評価を判断して、その結果を委員会に報告する。
2　委員長は、各委員からの報告を受けて査読委員会を開き、論文掲載の可否を審議し、編集委員会に報告する。

（任期）
第5条　委員の任期は1年とする。ただし重任を妨げない。

（改廃）
第6条　この規程の改廃は、研究所協議会の議を経て、研究所長が決定する。

附　則
1　この規程は平成九年四月一日から施行する。

執筆者紹介（掲載順）

高木　訥元　密教文化研究所所長・専従研究所員
（文学部教授）

甲田　宥吽　密教文化研究所専門員

岩崎日出男　密教文化研究所委託研究員
（園田学園女子大学国際文化学部助教授）

森　雅秀　密教文化研究所専従研究所員
（文学部助教授）

編集後記

『密教文化研究所紀要』第十三号をお届けいたします。今号には高木訥元、甲田宥吽、岩崎日出男、森雅秀各先生の論文を掲載いたしました。高木先生と岩崎先生の論文は、彙報に報告されているように、今年度行われた「弘法大師の思想とその展開に関する研究会」による成果の一部です。また、森先生の論文は、本文中にもあるとおり、平成十年八月に中国青海省同仁県において行われた現地調査の報告です。チベット文化史の一つの潮流であるポン教については、欧米での研究が進みつつあるとはいえ、日本ではいまだ緒についたばかりという段階にあります。今回は未公開の写真も含まれており、多くの意味で貴重な報告となりそうです。

（甲田記）

高野山大学密教文化研究所紀要　第十三号

平成十二年二月二十一日　印刷
平成十二年二月二十五日　発行

編集者　密教文化研究所
代表者　高木訥元

発行所　密教文化研究所
和歌山県伊都郡高野山高野山大学
電話（〇七三六）五六―二三九〇　〒六四八―〇二八〇

印刷所　第一印刷出版株式会社
大阪市福島区福島七―一三―一
電話（〇六）六四五八―五八七一～六　〒五五三―〇〇〇三

© Research Institute
of Esoteric Buddhist Culture
Koyasan University
Printed in Japan 2000